

## 能楽における草木成仏思想の展開

メタデータ	言語: ja 出版者: 武蔵野大学通信教育部 公開日: 2024-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 末光, 里枝子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000248">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000248</a>

# 能楽における草木成仏思想の展開

末 光 里枝子

## はじめに

能に登場する仏語は多い。そこでは、仏教思想に彩られて話の筋が展開し、仏教信仰に導かれて主人公は語り、舞を舞う。深奥な思想をおった一語一語は、舞台の上で軽やかに台詞にのり、謡にのり、立ちあらわれる。「草木国土悉皆成仏」という語もそのような大切なキーワードの一つである。しかし、草木も国土もすべて皆成仏するというこの言葉は、理解の及ばない釈然としない内容が含まれていると考えられる。それにも拘らず、一曲全体が盛り上がる重要な場面で使われることが多いので、印象が強く疑問を伴いながらも、逆にそれゆえに記憶に残る言葉となっている側面がある。この句と能のかかわりについて考察していきたい。

この句は五大院安然(841-?)が『中陰経』にみられる<sup>1</sup>と『斟定草木成仏私記』に記した事が初出とされ<sup>2</sup>、能の詞章に残り、現代の能楽においてもよく見聞きされる。「一樹の蔭に宿り一河の流れを汲むも、みなこれ他生の縁」「和光同塵」とともに能を通観して繰り返されることの最も多い句としてあげられる<sup>3</sup>こともある。

## 1 《春日龍神》に見る「草木国土悉皆成仏」の句の扱い方

この句の能の詞章における扱いについて調べたところ、現行曲 234 番中 29 番<sup>4</sup>に「草木国土悉皆成仏」の句がみられる。いろいろな形をとって、この句が能の詞章に取り入れられている。

その中の一つに《春日龍神》<sup>5</sup>がある。春日明神の導きにより、僧が入唐渡天を思いとどまるという筋立ての一曲である。釈迦牟尼仏の誕生から入滅まで悉くを見せようと五天竺を三笠の山に移すと、春日野の野山が黄金の世界となり、草木は仏体とな

り、説法の聴聞に龍王達が参集する。

「草木国土悉皆成仏」の句の原典である『中陰経』の妙文には「一仏成仏観見法界 草木国土悉皆成仏」とあり、その偈文は「身長丈六光明遍照 悉能説法其佛皆名 妙覺如來」と続く。成仏した草木が光り輝く丈六の仏となって、悉くよく説法するという草木の成仏の姿をあらわしている。

釈迦牟尼仏の出現に、野辺が黄金に輝き、草木が仏体と化したという《春日龍神》における草木国土成仏の表し方は、この「一仏成仏観見法界 草木国土悉皆成仏 身長丈六光明遍照 悉能説法其佛皆名 妙覺如來」の部分に通じるものがあるといえる。「草木国土悉皆成仏」の句をさらに源流の經典にまでたどって行き、『中陰経』の偈文に至り、そこにあらわされた世界を謡曲の世界に描き出しているとも捉えられる。

しかし、「一仏成仏観見法界 草木国土悉皆成仏 身長丈六光明遍照 悉能説法其佛皆名 妙覺如來」の偈文はもとより「草木国土悉皆成仏」の句、そのパーツである「草木国土」「悉皆」「成仏」「草木成仏」「国土成仏」などは、《春日龍神》の詞章には表れてこない。「草木国土悉皆成仏」の句を使わずに草木国土成仏の様子、変化した状況を表しており、他の謡曲にはない扱いの曲になっている。

中国天台の六祖湛然が澄観と天台と華嚴の優劣について論争した際<sup>6</sup> 草木の仏性論について、それぞれ仏性、法性と立場を異にし、論戦が張られた。湛然は色心・依正不二として非情の草木にも仏性はあるとし「無情仏性」を主張したが、澄観は心の主体的な働きに重きを置く華嚴的立場から、「仏とは、これ覺人にして靈智の覺あり。…故に仏性と名づく。非情に覺なし」として、非情の存在については仏性ではなく法性と称すべきだとし、草木の発心成仏を退けた<sup>7,8</sup>。

この天台の流れを受けて、日本において、さらに

現実の事象こそ永遠の生きた姿である<sup>9</sup>と見る本覚思想が展開された。「草木国土悉皆成仏」のあらわす教義は、天台宗、ことに本覚思想において熟成されたものといわれる<sup>10</sup>。日本独自の発展を見たこの思想は、その影響の強さから反動も大きく、論議が展開され、多くの批判を呼んだ。他宗からだけでなく天台宗からの批判、修行無用論への反省などもあったが、「草木国土悉皆成仏」の教義は天台の宗旨のものにとらえられた。

また、《春日龍神》は1465年以前に作出され、金春禪竹(1405-1470?)の作であろうとされる<sup>11</sup>。このような前提に立ってなぜこの句が使われなかったのか、意図的に使われなかったのかという事について、考察していきたい。

ここで、本論文に関わる先行研究を整理しておきたい。能勢朝次氏は『能楽源流考』において能の成り立ちから変遷の歴史を膨大な資料を提示して見解を示された。本論文では金春座の成り立ち、禪竹、元氏、禪鳳の生涯について、大和猿楽について、金春座を取り巻く環境について、興福寺大乘院、門跡たちとのかかわりについてなど、この著書に拠る所が大きかった。

伊藤正義氏の文献調査は禪竹資料の基底となり、その厳格な文献研究により、禪竹作と考えられる能について究明された。禪竹とその作品について、伊藤氏の研究を踏まえ、『伊藤正義中世文華論集』『新潮日本古典集成謡曲集』などの著書を拠り所として本研究をすすめた。

天野文雄氏の広範にわたる研究が『能苑逍遥』によって窺われ、能作者と能作品の成立について多岐にわたる新知見が得られた。能楽師をめぐる環境についても多くの示唆を得られた。作者と作品の成立について『世阿弥を学び、世阿弥に学ぶ』によった。

能《春日龍神》については樹下好美氏の「龍神物の能の成立—金春禪竹の関与の可能性をめぐって—」があり、氏は《春日龍神》が禪竹の作品である事を強く述べられ、多角的に検証され《春日龍神》を龍神ものの嚆矢ととらえられる。本稿でも禪竹作品である事は揺るがないと確認するに至った。

世阿弥と禪竹の能楽論についての表章氏の学識の深さは禪竹の思想世界を探訪する大きな手がかりとして本研究にとって欠かすことのできない先行研究

であった。

天台教学、本覚論については、田村芳朗氏の著作に学び、草木成仏の思想については主に宮本正尊氏、末木文美士氏の学説によった。本研究の基盤となっている。

本研究全般を通し、能楽全体としては西野春雄氏・羽田昶氏『能・狂言事典』、謡曲全体としては佐成謙太郎氏『謡曲大観』、仏教思想については、中村元氏・福永光司氏・田村芳朗氏・今野達氏・末木文美士氏『岩波仏教辞典第二版』によった。

このように、これまで禪竹に関して幾つかの極めて重要な研究がなされてきた。しかしながら、管見の及ぶ限り、この《春日龍神》の草木成仏の描写について「草木国土悉皆成仏」の偈が扱われていない事に関わる論及はみられなかった。

## 2 興福寺と南都北嶺

《春日龍神》の能は、僧が春日の里につき、晴れ渡る空は和光の光あらたなり、山は古今に至る神道を表し、里は平安の衢で人間長久の聲に満ちている、と情景を謡い春日の地をたたえる所から展開される。

この能の舞台である春日の地に鎮座する春日明神は鹿島・香取、牧岡の二柱の計四柱の神々の総称である。「786年四座揃って鎮座の典をあげるにいたった。ここに、藤原氏の氏社として春日神社が成立した」<sup>12</sup>。そして「興福寺の発展と神仏習合思想の展開にともない興福寺の守護神として位置づけられ、12世紀初頭ころには興福寺に支配される」<sup>13</sup>にいたり、興福寺の寺院勢力は隆盛していく。それは、南都北嶺という語にも端的に表れていると思われる。「ふつう南都は、京都の南にある奈良を意味するが、9世紀初め新興天台宗の開祖最澄が、法相宗ほか奈良諸宗と論争した際、奈良仏教諸宗を指す語として使用した。10世紀後半から強大な僧兵を養い、藤原氏の氏神である春日神社の神木を奉じた興福寺と、日枝神社の神輿を奉じた延暦寺が、しばしば朝廷に強訴したり、両者相争ったりしたため、この両者を併せて示す語となった」<sup>14</sup>。北嶺は比叡山延暦寺のことであり、南都は興福寺のことをさしている。権門として雌雄を争う二大勢力だったこと

が窺える。永久元年（1113）興福寺と延暦寺の衆徒の闘乱並びに官軍の出兵をみた南都北嶺強訴<sup>15</sup>など、その事例は枚挙にいとまない<sup>16</sup>。しかし、力による争いだけではなく、本来の教義によるものもあった。応和の宗論（963）では、良源など天台の学僧と法蔵仲算はじめ法相宗を中心に華嚴宗、三論宗を含む南都の学僧、それぞれ十人の間で論議が交わされた。一乗悉皆成仏と三乗成仏の立場での論議だったが、退出時良源の牛車の牛が芳香を放つよだれで一首の歌を表したという説話<sup>17</sup>が残されている。「草木も仏に成ると聞く時は情ある身の憑もしきかな」という歌は人々の口の端に上り、草木成仏思想がわかりやすく解され、当時の社会において理解が進んでいた事の一端が窺える。草木成仏思想が本覚思想をおったものという位置づけに立てば、本覚論が文学の様々なジャンルに及んでいるという研究には三崎義泉氏の『止観的美意識の展開』<sup>18</sup>があり、詳細をきわめる。

### 3 花見と修行

「草木国土悉皆成仏」の偈が謡われる能の一つに《西行桜》<sup>19</sup>がある。この能ではワキ僧が、「それ春の花は上求本来の梢に現れ 秋の月下化冥闇の水に宿る（中略）草木国土自づから 見仏聞法の結縁たり さりながら四の時にも優れたる花実の折なるべし。あら面白や候」<sup>20</sup>と桜の花盛りを讃える。しかし、花見に人々が群れ訪れると、出家隠棲の身にこの賑わいはいかがなものだろうか。「花見んと群れつつ人の来るのみぞ あたら桜の咎にはありける」<sup>21</sup>と謡い、眠りにつく。これを受けて、老翁の姿をしたシテの桜の精が、僧の夢に現れ、桜に咎はないのだと応ずるものである。この花見を良しとみるか、隠棲し仏道を修行する事の妨げになるとみるか。これと似たような逸話が、現実においても、京都の東福寺に残されている。1408年吉山明兆が「大涅槃図」を完成させた時、褒美として修行の妨げとなる境内の桜の伐採を願い出て、感動した將軍により許された<sup>22</sup>というものである。

花見は今につながる季節の風物詩であるが、これは天台本覚思想に照らしてみれば、花という「現実の事象こそ永遠な真理の生きたすがた」<sup>23</sup>であり、

伝良源『草木発心修行成仏私記』によれば、草木が芽を出すのが発心する姿であり、成長し花を咲かせ実をつけるのは修行成仏する姿なのだという<sup>24, 25, 26</sup>。花見と桜の木の伐採は草木成仏の天台と修行重視の禪門という宗門宗旨の違いや、権力者により同じことでも捉え方は変化し、その趣向が宗門の勢力図にも反映する事を物語っているといえる。

禪門の台頭や南都北嶺の及ぼす影響は能に携わる者としても留意することであつたろうし、將軍をはじめ、寺社権門、公卿、武家等の庇護者や興行主の意趣を理解するのは重要なことであつたと思われる。逆に、意向教義を理解せず趣旨を違えることは物議を醸し、存続の危機を伴うこととなる。

能を大成した世阿弥も、晩年は冷遇をされ、1434年足利義教によって佐渡流罪となる<sup>27</sup>。併せて継承者の元雅への迫害客死という悲劇にも見舞われている<sup>28</sup>。権力者に近く、その庇護を受けるか憂き目を見るかは表裏する栄枯盛衰であつたと思われる。能作者としても能役者としても時勢や時流を見極め、新しい感覚を取り入れながら、求められているものは何か、どこまでが許されるかの模索と判断が続いたことと思う。將軍義持、義教に近侍する世阿弥の能作の工夫は天野文雄氏の『世阿弥がいた場所』<sup>29</sup>に詳しい。

この時代を生き抜く能作者にとって、仏教的思想も含めて知識や教養を身につけ新しく取り入れていくことが一身一門にかかわる重要なことであり、それとともに知識教養を広範に庇護者たち他者と共有していることが、他者への理解を的確なものとし、他者からも一目置かれる存在として、その身を守つたであろうと考える。「草木国土悉皆成仏」の偈及び草木成仏思想の受容と理解もその一端として、広く深められるとともに変化し、その扱いについても工夫が必要になっていったと考える。

### 4 粟田口勸進能における質疑と応答

『粟田口猿楽記』は永正二年（1505）四月に行われた金春禪鳳の勸進能の記録である。そこには禪鳳の父元氏が、禪鳳の祖父禪竹と親交の深かった一条兼良に謡について相談をしたことを伝える記事が残されている。

『粟田口猿楽記』には次のようにある。

うねめの草木国土成仏もこれは性宗の法門也相  
宗擁護の春日の明神にてわたらせ給ふなれは  
うねめもさは申ましきこと葉にても侍らんかし  
とあれはことはをとりかふるまでもなく  
たゝかりそめにうふるとも神木とおほしめて  
よく侍らんと宗寅申しゝなとかたられき<sup>30</sup>

《采女》は猿沢の池に身を投げた采女をシテとする能である。都から南都へ下向する僧が春日の里につく、そこにて木を植えていた采女は、その木を「草木国土成仏の 神木」<sup>31</sup>と説明する。また後場では猿沢の池に身を投げた采女が成仏を願って「恥かしながら古の 采女が姿を現すなり 佛果を得しめ おはしませ もとより人々同じ仏性なり 何疑ひも 波の上 水の底なる鱗類うろくずや乃至草木国土まで悉皆成仏疑ひなし ましてや 人間に於いてをや 龍女が如く我もはや 變成男子なり采女とな思ひ給ひそ」<sup>32</sup>と僧とともに謡う。

猿沢の池という場所は興福寺春日明神の神域である。相宗擁護のこの地で、天台の法門の「草木国土成仏」を采女が言うはずがない、と相談したというのである。

これは《春日龍神》において「草木国土悉皆成仏」の句をあえて使わないという配慮を、能作者がしていたとしたら、その配慮と同じ趣旨のことである。南都北嶺の宗旨の違いについて配慮する意識が存在していたことをここから確認することができる。

この『粟田口猿楽記』は禅竹の孫の禅鳳の勸進能の記録であり、禅竹を女婿とする世阿弥が活躍した時代から見れば、はるかに時間が経過したこととなる。《采女》の初出は1430年であり《春日龍神》の初出は1465年である<sup>33</sup>。粟田口勸進能は1505年である。世阿弥がこの句を使って一曲を創作した時には存在しなかった配慮が、必要とされるようになっていたことを約75年後の記録で確認できたということになる。「草木国土悉皆成仏」という句のもつ思想的背景への認識が進んだことを表すと考える。

## 5 《春日龍神》の詞章から

教義の違いへの配慮から「草木国土悉皆成仏」の句の使用を避けるという方向性が存在したことについて、それが何時からのものなのかについて考察したい。一条兼良は文明13年(1481)に没し<sup>34</sup>、禅竹は文明3年(1471)以前に、65歳前後で没している<sup>35</sup>。禅竹没後の1471年頃以降1481年までの間に元氏が一条兼良に、「草木国土悉皆成仏」の詞章について相談しているのである。この質問の前提として、禅竹は存命中に「草木国土悉皆成仏」偈の扱いについて何らかの見識を持ち、扱いについての判断をしていたのではないか、という事が考えられる。「ことはをとりかふるまでもなく」としているのは、「言葉を変えた方がいい」という趣旨の前提があったからと考えられ、元氏の経験、判断の中で、春日の地の能では「草木国土悉皆成仏」の偈を謡わない方が良い。もし詞章にあれば、変えた方がいいという考えがあったのではないかと思われる。1465年初出の《春日龍神》についての経験や判断がこの相談にかかわっているのではないかと考える。

《春日龍神》創作時において、禅竹はどのように考えていたのかについて、《春日龍神》の作中の言葉より確認したい。

### (1) 「比叡山にまいるべし」について

《春日龍神》前場において仏跡を我が国に配する場面がある。これは出典とされる<sup>36</sup>『古今著聞集』「高辯上人、例の人に非ざる事」<sup>37</sup>、『金玉要集』「春日大明神御事」<sup>38</sup>、出典の根源とされる『高山寺古文書』「僧成辨願文」<sup>39</sup>ではなく、作者の趣向のこもった場面になっている。「天台山を拜むべくは 比叡山に参るべし 五台山の望みあらば 吉野筑波を拜すべし 昔は靈鷲山 今は衆生を度せんとして 大明神と示現し この山に宮居し給へば すなはち鷲の御山とも 春日のお山を拜むべし」<sup>40</sup>と謡い、ワキの僧明恵上人が入唐渡天し仏跡を訪ねたいと願うのに対し、唐やインドの仏跡ではなく、日本の比叡山、吉野筑波、春日の山を拜せよとシテの春日宮守の翁(時風秀行)が諭す場面である。

ここにおいては、比叡山の存在は認められ天台へ

の信仰もまた良しとされている。また、例に挙げられる中国の天台山は中国天台宗の根本道場であり、最澄が学んで日本に天台宗を伝え、天台宗寺門派の祖円珍、東大寺の勸進に努めた重源、臨済宗の祖栄西なども留学している<sup>41</sup>。五台山も中国の霊山<sup>42</sup>であり、第3世天台座主円仁が苦勞の末にたどり着き学んだ地である<sup>43</sup>。どちらも天台宗にとってゆかりの深い霊山である。春日に対する比叡山という対立関係ではなく、共立共存の聖地であり、春日の地の優位性を保ちながらも調和的意識が読み取れ、天台宗を排除しなければいけないという意識は認められない。

## (2) 「仏体」について

《春日龍神》の「春日の野山金色の 世界となりて草も木も 仏体となるぞ不思議なる」<sup>44</sup>という詞章について、世界が金色と化すという描写は、『法華経』の「眉間光明 照于東方 萬八千土 皆如金色」<sup>45</sup>によるとの指摘がある<sup>46</sup>。

『法華経』序品において世界が金色に化したのは竜王たちが参集した後、釈迦の眉間の白毫から光が発せられ東方の世界が照らし出されたという描写である。しかし、そこにはとりたてて草木が成仏したという描写はない。《春日龍神》のように龍神たちが参集する前に草木が成仏したという描写も『法華経』にはなく、「仏体」という言葉も出てこない。『法華経』全体においても「仏体」の語は出てこない。作者は草木成仏を表す言葉として、この語を考えだし意識的にここに使っていると考える。草木成仏した姿を「妙覚如来」と表現したら、これは『涅槃経』のいうところであり、天台教義における草木が成仏した姿という事になる。草木成仏について天台の教義と色付けされる事を避けるための手段であり、法相宗興福寺への配慮とも考えられる。しかし、草木が草木のままの姿で金色と化したというのではなく、成仏して「仏体」という形に変化したという点で『涅槃経』にいうところの身長丈六の妙覚如来になったという「仏体」への変化をひいている。「体」を言う事で姿かたちを持つというイメージ性が強調され、仏と変じた物体が目の前に出現するという実体的な、より具体的な草木成仏の姿が描きだされる。草木成仏の描写を具象化し、それに

より明確に意識化され、印象に残る詞章になっている。しかし反面、内実を問われない形のみにより意識を集約させる側面をもつといえる。「仏体」がどのようなものを表すのかについて次章で考察したい。

## (3) 「龍王」について

《春日龍神》後場では、下界の龍神たちが参集し、次いで龍女があらわれ、釈迦の一代記を聴聞する。これは、出典とされる<sup>47</sup>『古今著聞集』[高辯上人、例の人に非ざる事]<sup>48</sup>、『金玉要集』[春日大明神御事]<sup>49</sup>、出典の根源とされる『高山寺古文書』[僧成辨願文]<sup>50</sup>にはなく、この謡曲独自に創作された場面である。ここに参集する龍王たちについて、『法華経』序品と照応がみられる。これについては樹下好美氏の「一曲中の重要な一場面をそっくり經典の文句を借りることにより構成するという傾向は、そう多くはないようだ。」<sup>51</sup>「法華経序品丸取りで八大龍王の参会が描かれる」<sup>52</sup>という指摘がある。『法華経』の表現と比すと以下のようなになる。

### 《春日龍神》後場

下界の龍神の参会か すは八大龍王よ 難陀龍王 跋難陀龍王 娑伽羅龍王 和脩吉龍王 徳又迦龍王 阿那婆達多龍王 百千眷属引き連れ引き連れ 平地に波瀾を立てて 仏の会座に出来して 御法を聴聞する そのほか妙法緊那羅王 また持法緊那羅王 樂乾闥婆王 樂音乾闥婆王 婆稚阿修羅王 羅睺阿修羅王の 恒沙の眷属引き連れ引き連れ これも同じく座列せり<sup>53</sup>

### 『法華経』序品

屬萬二千天子俱。有八龍王。難陀龍王。跋難陀龍王。娑伽羅龍王。和脩吉龍王。徳又迦龍王。阿那婆達多龍王。摩那斯龍王。優鉢羅龍王等。各與若干百千眷屬俱。有四緊那羅王。法緊那羅王。妙法緊那羅王。大法緊那羅王。持法緊那羅王。各與若干百千眷屬俱。有四乾闥婆王。樂乾闥婆王。樂音乾闥婆王。美乾闥婆王。美音乾闥婆王。各與若干百千眷屬俱。有四阿修羅王。婆稚阿修羅王。佉羅騫駄阿修羅王。毘摩質多羅阿修羅王。羅睺阿修羅王各與若干百千眷屬俱。有四迦樓羅王。大威徳迦樓羅王。大身迦樓羅王。

大満迦樓羅王。如意迦樓羅王。各與若干百千眷屬俱。韋提希子阿闍世王。與若干百千眷屬俱。各禮佛足退坐一面<sup>54</sup>

『法華經』の八龍王、四人の緊那羅王、四人の乾闥婆王、四人の阿修羅王、四人の迦樓羅王とマガタ国の王である阿闍世王の合わせて二十五尊の中から、難陀龍王 跋難陀龍王 娑伽羅龍王 和脩吉龍王 徳叉迦龍王 阿那婆達多龍王 妙法緊那羅王 持法緊那羅王 樂乾闥婆王 樂音乾闥婆王 娑稚阿修羅王 羅睺阿修羅王の十二尊が《春日龍神》に登場していることがわかる。

《春日龍神》では、続いて龍女出現の場面に転じ「龍女が立ち舞ふ 波瀾の袖 龍女が立ち舞ふ波瀾の袖」<sup>55</sup>と謡う。ここに登場する龍女も『法華經』提婆達多品の龍女成仏を受けての事である。《春日龍神》の後場の着想、構成に『法華經』が関与しているといえる。

《春日龍神》には全体を通して、天台宗を排除する意識は認められず、むしろ親和的といえる。

草木成仏の視点から見れば、前場は「膝を折り角を傾け 上人を礼拝する」<sup>56</sup>鹿と共に、出典<sup>57</sup>には認められない「風も吹かぬに枝を垂れ」<sup>58</sup>の森の草木の姿を配して、非情の草木が金色の仏体へと変じる序章とし、後場では龍神龍女という畜類成仏、女人成仏の象徴を登場させ、一乗皆成仏の世界を描きだす。「草木国土悉皆成仏」の偈にふさわしい設定といえる。「草木国土悉皆成仏」の偈が自然に謡いだされそうな設定に、あえて謡っていないという事が、他の草木成仏を扱った謡曲に比して、際だった特徴に感じられる。

## 6 『明宿集』との関わり

『明宿集』は禅竹自筆が確認されている伝書<sup>59</sup>で、金春流円満井座の由来、猿楽における翁信仰、さらに総じて、諸相の帰結を翁に一元化する禅竹の思想が著されている。「混沌とした中世思想界の様相を、禅竹における反映として見ることができる」<sup>60</sup>といわれる。ここでは、『明宿集』にみられる草木成仏観と《春日龍神》における春日野の草木成仏に類似

点が認められる事について確認するとともに、併せて禅竹の思考傾向について考察したい。

### (1) 《地蔵・翁一体の事》について

「一、地蔵薩埵ワ、春日ノ御本地ノ中ニ於キテ、コトニ示現方便所々ニアマネク、巷ニ繁シ。国土草木、皆コノ尊ノ御姿也。」<sup>61</sup>とあり、春日の地において地蔵菩薩は様々なところに示現方便しており、国土草木はすべて地蔵菩薩の御姿なのだとしている。「仏体」という言葉は禅竹の思考において、この地蔵菩薩の御姿を表していると考えられる。

草木成仏の本体は地蔵菩薩であり、それは金剛界胎蔵界に遍満する大日如来であり、翁と同体であるという説が展開されている。そして「コ、ニ至テ見ル時ハ、有精・非精、皆翁也。」<sup>62</sup>と有情も非情もすべて翁であると解して、草木成仏への独特のアプローチをみせている。翁という言葉を使っているが、これは、「現実の事象こそ永遠な真理の生きたすがたであ」<sup>63</sup>とする天台本覚思想に通じる見方であると考えられる。

### (2) 《法華經と翁 神と仏》について

この章は《地蔵・翁一体の事》に続く章で、「法華廿八品、皆其用文ヲ引タテマツルベシ。序品勢揃エテ、王ノ字アマタアリ。」<sup>64</sup>と切り出し、「又、提婆品、天王如来ノ記別アリ。竜女成仏…」<sup>65</sup>と続ける。「王ノ字アマタアリ」<sup>66</sup>は先にみた法華經序品の八龍王、四緊那羅王、四乾闥婆王、四阿修羅王、四迦樓羅王と韋提希子阿闍世王の二十五尊の事であり、《春日龍神》後場の龍神参集の表現に通じる。『明宿集』には「王ハコレ翁ナリ」<sup>67</sup>とする禅竹の考えがみられ、『法華經』序品で次々と続いた数多の王たちはそのまま翁の勢揃いといえる。しかし、序品にはさらに多くの人々神仏が登場し、記載される名称も多い<sup>68</sup>。一万二千人の比丘達の阿羅漢としての名前、阿若怯憍陳如や摩訶迦葉、優樓頻螺迦葉などの十大弟子の名前、学無学の二千人、育ての母と妃であった二人の比丘尼の名前その六千人の眷属、八万人を俱す菩薩、摩訶薩の名前、釈提棺因が眷属と二万天子を俱しその名前は名月天子普香天子宝光天子、万天子や眷属を俱す四大天王、三万天子を俱す自在天子大自在天子、続いて娑婆世界の主、梵天

王、尸棄大梵が眷属と万二千天子を引き連れ、その後八龍王の名前が出てくる。多くの記載がある中、禅竹は王のつく部分にのみ着目している。序品に記される全ての尊格において王という文字がつくこの他の尊格は、天王、薬王菩薩である。薬王菩薩は、これは「コトニ薬王菩薩品」<sup>69</sup>として《法華・翁一体の事、神真宗》に記載される。天王についても「記別アリ」<sup>70</sup>と注している。禅竹にとっては王のついでる尊格が勢ぞろいして参集する様が大変面白く、自己の思念の翁に合致するものを感じ、創作意欲が湧いたのだと思われる。そこにはこの『明宿集』にみられる翁への強い思いがあり、《春日龍神》において、その具象化の妙が練られたと考える。

また、この『明宿集』の草木成仏から序品の王達、提婆達多品の龍女へと続く話題の展開の順はそのまま《春日龍神》の詞章に見る展開順である。『法華経』の他の記述が省かれるのも同じである。《春日龍神》と『明宿集』の関係性は強いと考えられる。成立についても『明宿集』は伊藤正義氏の検証により寛正六年（1465）前後<sup>71</sup>とみられ、《春日龍神》の初出寛正六年<sup>72</sup>と同年である。近い時期にどちらも禅竹により著されたと考えられる。

### (3) 《諸宗の祖師、翁と一体分身の事》について

ここでは仏教を禅・教・律・真言とし、それぞれに達摩大師、天台伝教大師、興正菩薩、弘法大使の名を挙げるのだが、興正菩薩について「春日ノ一ノ御殿ニ入給フ」<sup>73</sup>と秘伝<sup>74</sup>には言っている云々、とする。教の所には小さく「法相宗又可レ有レ之」<sup>75</sup>と書き添えてある。仏教全体を概観しようとする中で、春日社、法相宗への配慮を忘れてはいない。さらに、余宗の祖師・先徳にまで、視野を広げて、「ソノ内証ヲ知り外儀ノ振舞ヲワキマエ」<sup>76</sup>と記す。宗派ごとに異なる立場、各人の意向を尊重する態度であり、教義の奥にある内面の真理まで知るように努め、外面に現れる振る舞いを良くととのえ、わきまえを持ちなさい、と継承者たちを思い、説き伝えようとしている。それぞれの教義に対する慎重なふるまいを求めているといえる。法相宗擁護の春日の地を舞台にする能で、その法相宗の教義に外れる草木国土悉皆成仏の句を使わない方が良いという事に通じる考え方である。『栗田口猿楽記』に見た元氏

の相談はこのふるまいを熟慮した態度といえる。

万物に網羅する独特の思想を形成した禅竹は自身の存在の根元につながる翁を介してあらゆる神仏祖師先達に尊崇の念を有していたと考える。「草木国土悉皆成仏」の偈の由縁を知っていたとすれば、《春日龍神》において草木成仏をその偈を使わず描くことは、法相宗擁護の春日の地を舞台にする能として神仏に対する必然の配慮といえる。特にこの春日社興福寺に対する信仰の広がり強さを思えば、法楽能<sup>74</sup>などに集まる観衆、社寺関係者衆徒修学者たちへの配慮でもある。また、春日社興福寺に奉侍する能楽者としての見識に関わる配慮ともいえる。

### おわりに

「草木国土悉皆成仏」の言葉は能に取り入れられよく謡われるが、その本来の成り立ちにおいて、見解の相違があり、しばしば論争を巻き起こす端緒となり、批判を浴びる言葉でもあった。南都北嶺の教義の違いを端的に表す言葉であったといえる。

能楽師にとって庇護者の意趣を理解し、違えない事は、その存続にかかわる重要なことであった。禅竹の『明宿集』においてもその意識は読み取れ、継承者へ伝えるべき基本的な考え方であった。能楽師を取り巻く環境も時流により変化し、この言葉の思想的背景への理解の広がりや深化は、その使用について変化を生じさせた。特に南都北嶺に象徴される春日の地において配慮は必然のことだったといえる。この地を寿ぐ趣向の《春日龍神》においては、北嶺の教義の一端として象徴的に扱われるこの言葉の使用については控えようという判断が働き、そこにおいて工夫され編み出された表現が「仏体となる」であったと考える。この「仏体」は禅竹の思想をおった言葉であり、《春日龍神》は、全体においても、禅竹の翁を介した思想がよく表されているといえる。特に後場は『法華経』に舞台設定を借りながら、禅竹独自の翁観における翁の示現を根底に、躍動感あふれる展開となっている。「草木国土悉皆成仏」の偈は排したが、全体において天台宗やその教義を排そうという意識は感じられない。むしろ親和的であり、一乗悉皆成仏の世界観を昇華させその言葉を使わずに表していると考えられる。

## 謝 辞

令和2年度特定課題研究の成果としての論文について、武蔵野大学大学院の西本照真先生に御指導を仰ぎ、その折の今後の研究課題をテーマに本論文を作成しました。また、武蔵野大学大学院の佐藤裕之先生にはご助言を賜り、鈴木健太先生の法相宗、遠藤祐介先生の中国思想のご講義を受けさせていただいたこともありがたく、感謝申し上げます。

## 注

- 1 『中陰経』における妙文は『溪嵐拾葉集』にみられ、以下にあげる。  
『大正新脩大藏経』(溪嵐拾葉集 光宗撰 第76巻 549頁下段22～25)。  
中陰経云一佛成佛觀見法界草木国土悉皆成佛身長丈六光明遍照悉能說法其佛皆名妙覺如來云云(中陰経云。一佛成佛觀見スルニ法界ヲ。草木国土悉ク皆成佛ト。身ノ長丈六ナリ。光明遍ク照悉能ク說法ス其佛皆名妙覺如來 云云 経云。)
- 2 末木文美士『草木成仏の思想』(株式会社サンガ 2017 233頁)。
- 3 岩見護「謡曲にあらはれた仏教思想」(大谷大学研究年報第7集 大谷学会 1954 20頁)。
- 4 『観世流謡曲百番集』には105番、『観世流謡曲続百番集』には108番が所収されている。これら観世流のものを含め、『謡曲大観』にはシテ方五流あわせて235番の謡曲が所収されている。第一巻49番、第二巻50番、第三巻51番、第四巻47番、第五巻47番の合計244番である。そのうち、流派により異名となる同曲のものは9番ある。この9番の他に《笛之巻》が観世流にあり、《橋弁慶》の小書きである。《橋弁慶》では前シテ後シテとも武蔵坊弁慶なのだが、《笛之巻》では前シテに常盤御前、前子方に牛若丸が登場し、夜な夜な五條の大橋で人を斬る牛若に母常盤御前が叱責し笛の由来を説く前段に代わっている。『謡曲大観』では《笛之巻》は《橋弁慶》の変型として付随して収められ、観世流謡本では橋弁慶は『観世流謡曲百番集』に笛之巻は『観世流謡曲続百番集』に収められている。ここでは同曲と捉えて1番と数える。「草木国土悉皆成仏」の詞章が含まれる能の割合は、観世流では現行曲212番に対して26番で12.2%、五流すべてでは現行曲234番に対して29番の12.3%となる。現行曲において「草木国土悉皆成仏」に準ずる詞章のある能は一割以上の割合で認められる。  
具体的謡曲名は能のシテ方観世流に伝わる『観世流謡曲百番集』、『観世流謡曲続百番集』におさめられているものでは、《弱法師》、《当麻》、《定家》、《殺

- 生石》、《巴》、《西行桜》、《杜若》、《遊行柳》、《熊坂》、《放下僧》、《半部》、《野守》、《采女》、《知章》、《藤》、《現在七面》、《仏原》、《胡蝶》、《舍利》、《西王母》、《春日龍神》、《鶴》、《身延》、《道明寺》、《六浦》、《芭蕉》の26番がある。この26番以外に他流に伝わるものとして、シテ方金剛流に《墨染桜》、《雪》、金春流に《佐保山》の3番があることが、『謡曲大観』により確認できる。『謡曲大観』には観世・宝生・金春・金剛・喜多のシテ方五流の現行曲が所収されている。この3番をあわせて29番となる。
- 5 観世左近『観世流続百番集』(檜書店 1952 808～818頁)。
  - 6 田村芳朗・梅原猛『絶対の真理』(角川文庫 1996 42頁)。
  - 7 田村芳朗・梅原猛『絶対の真理』(角川文庫 1996 42頁)。
  - 8 田村芳朗「天台本覚思想概説」(『天台本覚論 日本思想大系9』岩波書店 1973 487頁)。
  - 9 田村芳朗「天台本覚思想概説」(『天台本覚論 日本思想大系9』岩波書店 1973 482頁)。
  - 10 宮本正尊「『草木国土悉皆成佛』の佛性論的意義とその作者」(『印度学仏教学研究』1961 678頁)。
  - 11 天野文雄『世阿弥を学び、世阿弥に学ぶ』(付「能作史年表」大阪大学出版会 2016 308頁)。  
樹下好美「龍神物の能の成立—金春禅竹の関与の可能性をめぐって—」(『中世文学第三十七号』中世文学会 1992)。
  - 12 『岩波仏教辞典第二版』「春日明神」項(岩波書店 2002 147頁)。
  - 13 『岩波仏教辞典第二版』「春日明神」項(岩波書店 2002 147頁)。
  - 14 『岩波仏教辞典第二版』「南都北嶺」項(岩波書店 2002 782頁)。
  - 15 衣川仁「延暦寺三門跡の歴史的機能」(永村眞編『中世の門跡と公武権力』戎光祥出版 2017 65頁)。
  - 16 衣川仁「強訴考」(京都大学学術情報リポジトリ 2002-9-01 6～11頁)。
  - 17 兵藤裕己『太平記(四)』(岩波書店 2015 136～141頁)。
  - 18 三崎義泉『止観的美意識の展開』(ぺりかん社 1999)。
  - 19 観世左近『観世流百番集』(檜書店 1973 622～633頁)。
  - 20 伊藤正義『謡曲集中』(新潮日本古典集成 新潮社 1983 82～83頁)。
  - 21 伊藤正義『謡曲集中』(新潮日本古典集成 新潮社 1983 85頁)。
  - 22 福島慶洲「慧日山東福寺の歴史」(『東福寺』淡交社 2008 101頁)。
  - 23 田村芳朗「天台本覚思想概説」(『天台本覚論日本思想大系9』岩波書店 1973 482頁)。

- 24 末木文美士『日本仏教史』（新潮文庫 2015 168頁）。
- 25 『岩波仏教辞典第二版』「草木成仏」『草木発心修行成仏記』項（岩波書店 2002 641頁）。
- 26 宮本正尊「草木國土悉皆成仏」の佛性論的意義とその作者」（『印度仏教学研究』1961 675～676頁）。
- 27 能勢朝次『能楽源流考』（岩波書店 1979 729頁）。
- 28 能勢朝次『能楽源流考』（岩波書店 1979 727頁）。
- 29 天野文雄『世阿弥がいた場所』（ペリかん社 2007 357～580頁）。
- 30 塙保己一『群書類従』363-23頁。（※変体仮名はひらがなに改めて表記した。）  
三宅晶子「一条兼良と金春禅竹」（『中世文学第四十八号』中世文学会 2003 26頁）。
- 31 観世左近『観世流統百番集』（檜書店 1952 76頁）。
- 32 観世左近『観世流統百番集』（檜書店 1952 80～81頁）。
- 33 天野文雄編『世阿弥を学び、世阿弥に学ぶ』（大阪大学出版会 2016 309～310頁）。
- 34 永島福太郎『一条兼良』（吉川弘文館 1988 1頁）。
- 35 伊藤正義『中世文華論集第3巻金春禅竹の研究』（和泉書院 2016 321頁）。
- 36 佐成謙太郎『謡曲大観第一巻』（明治書院 1931 668頁）。
- 37 西尾光一・小林保治『古今著聞集上』（新潮日本古典集成 新潮社 1983 118～124頁）。
- 38 伊藤正義『謡曲集上』（新潮日本古典集成 新潮社 1983 426～427頁）。
- 39 伊藤正義『謡曲集上』（新潮日本古典集成 新潮社 1983 426頁）。
- 40 伊藤正義『謡曲集上』（新潮日本古典集成 新潮社 1983 300頁）。
- 41 『岩波仏教辞典第二版』「天台山」項（岩波書店 2002 740頁）。
- 42 『岩波仏教辞典第二版』「五台山」項（岩波書店 2002 336頁）。
- 43 圓仁深谷憲一訳『入唐求法巡礼行記』（中央公論社 1995）。
- 44 伊藤正義『謡曲集上』（新潮日本古典集成 新潮社 1983 303頁）。
- 45 『大正新脩大藏経』（妙法蓮華経 鳩摩羅什訳 第9巻 2頁下段 14～15）。
- 46 伊藤正義『謡曲集上』（新潮日本古典集成 新潮社 1983 302～303頁）。
- 47 佐成謙太郎『謡曲大観第一巻』（明治書院 1931 668頁）。
- 48 西尾光一・小林保治『古今著聞集上』（新潮日本古典集成 新潮社 1983 118～124頁）。
- 49 伊藤正義『謡曲集上』（新潮日本古典集成 新潮社 1983 426～427頁）。
- 50 伊藤正義『謡曲集上』（新潮日本古典集成 新潮社 1983 426頁）。
- 51 樹下好美「龍神物の能の成立—金春禅竹の関与の可能性をめぐって—」（『中世文学第三十七号』中世文学会 1992 68頁）。
- 52 樹下好美「龍神物の能の成立—金春禅竹の関与の可能性をめぐって—」（『中世文学第三十七号』中世文学会 1992 69頁）。
- 53 伊藤正義『謡曲集上』（新潮日本古典集成 新潮社 1983 303～304頁）。
- 54 『大正新脩大藏経』（妙法蓮華経 鳩摩羅什訳 第9巻 2頁上段 20～中段 6）。
- 55 伊藤正義『謡曲集上』（新潮日本古典集成 新潮社 1983 304頁）。
- 56 『高山寺古文書』（高山寺典籍文書総合調査団編 東京大学出版会 1975 26～29頁）。
- 57 『古今著聞集』「高辯上人、例の人に非ざる事」、『金玉要集』「春日大明神御事」、『高山寺古文書』「僧成辨願文」には草木が礼拝するようになびく描写は無い。
- 58 伊藤正義『謡曲集上』（新潮日本古典集成 新潮社 1983 299頁）。
- 59 表章「世阿弥と禅竹の伝書」（『世阿弥 禅竹』日本思想大系 岩波書店 1974 581頁）。
- 60 伊藤正義『中世文華論集第3巻金春禅竹の研究』（和泉書院 2016 346頁）。
- 61 『明宿集』（『世阿弥 禅竹』日本思想大系 岩波書店 1974 414頁）。
- 62 『明宿集』（『世阿弥 禅竹』日本思想大系 岩波書店 1974 414頁）。
- 63 田村芳朗「天台本覚思想概説」（『天台本覚論 日本思想大系9』岩波書店 1973 482頁）。
- 64 『明宿集』（『世阿弥 禅竹』日本思想大系 岩波書店 1974 415頁）。
- 65 『明宿集』（『世阿弥 禅竹』日本思想大系 岩波書店 1974 415頁）。
- 66 『明宿集』（『世阿弥 禅竹』日本思想大系 岩波書店 1974 415頁）。
- 67 『明宿集』（『世阿弥 禅竹』日本思想大系 岩波書店 1974 408頁）。
- 68 『大正新脩大藏経』（妙法蓮華経 鳩摩羅什訳 第9巻 1頁下段 20～2頁中段 6）。
- 69 『明宿集』（『世阿弥 禅竹』日本思想大系 岩波書店 1974 410頁）。
- 70 『明宿集』（『世阿弥 禅竹』日本思想大系 岩波書店 1974 415頁）。
- 71 伊藤正義『中世文華論集第3巻金春禅竹の研究』（和泉書院 2016 346頁）。
- 72 能勢朝次『能楽源流考』（岩波書店 1979 784～789頁）。  
樹下好美「龍神物の能の成立—金春禅竹の関与の可能性をめぐって—」（『中世文学第三十七号』中世文学会 1992 67頁）。

- 73 『明宿集』(『世阿弥 禅竹』日本思想大系 岩波書店 1974 414頁)。
- 74 高橋悠介氏は、興正菩薩と称された叡尊の秘伝について、『大乘院寺社雑事記』に関連する記事がある事を指摘される。さらに叡尊と春日社第一殿との結びつきについて舍利信仰や「西の大寺」の詞章との関連も含めて、論述されている。(『円満井座の舍利と禅竹』松岡心平編『ZEAMI—中世の芸術と文化03』森話社 2005 141～147頁)。
- 75 『明宿集』(『世阿弥 禅竹』日本思想大系 岩波書店 1974 414頁)。
- 76 『明宿集』(『世阿弥 禅竹』日本思想大系 岩波書店 1974 414頁)。
- 77 天野文雄「春日若宮と能楽—若宮臨時祭、法楽能、祈雨立願能をめぐって—」(高橋悠介編『宗教芸能としての能楽』勉誠出版 2022 30～36頁)。
- 横道萬里雄・西野春雄・羽田昶『岩波講座能・狂言Ⅲ能の作者と作品』岩波書店 1987
- 伊藤正義『謡曲雑記』和泉書院 1989
- 表章「世阿弥と禅竹の伝書」表章・加藤周一校注『世阿弥禅竹 日本思想体系24』岩波書店 1974
- 高橋悠介「円満井座の舍利と禅竹」松岡心平編『ZEAMI—中世芸術と文化03』森話社 2005
- 天野文雄「春日若宮と能楽—若宮臨時祭、法楽能、祈雨立願能をめぐって—」高橋悠介編『宗教芸能としての能楽』勉誠出版 2022
- 岩見護「謡曲にあらはれた仏教思想」『大谷大学研究年報第7集』大谷学会 1954
- 三崎義泉『止観的美意識の展開—中世芸道と本覚思想との関連—』ペリかん社 1999
- 天野文雄『世阿弥がいた場所—能大成期の能と能役者をめぐる環境—』ペリかん社 2007
- 辻本臣哉「天台本覚思想の日本の諸思想・諸文化への影響」武蔵野大学学術機関リポジトリ 2018
- 中村元『現代語訳大乘仏典2『法華経』』東京書籍 2003
- 末木文美士「中世思想の転回と能」『能と狂言14』能楽学会 2016
- 松岡心平「翁の宗教的性格—荒神としての父尉—」『能と狂言14』能楽学会 2016
- 三宅晶子「一条兼良と金春禅竹」『中世文学第四十八号』中世文学会 2003
- 三宅晶子「禅竹のもたらした能の革新性」『能と狂言14』能楽学会 2016
- 樹下文隆「世阿弥から禅竹への継承」『能と狂言14』能楽学会 2016
- 石井倫子『風流能の時代—金春禅鳳とその周辺—』東京大学出版会 1998
- 西尾実・田中允他編「能本作者註文」『三省堂国語国文学研究史大成8 謡曲狂言』三省堂 1977
- 永村眞編『中世の門跡と公武権力』戎光祥出版 2017
- 田中貴子『『溪嵐拾葉集』の世界』名古屋大学出版会 2003
- 観世左近『観世流謡曲百番集』檜書店 1973
- 観世左近『観世流謡曲続百番集』檜書店 1952
- 西野春雄・羽田昶編『能・狂言事典』平凡社 1988
- 中村元・福永光司・田村芳朗・今野達・末木文美士編『岩波仏教辞典第二版』岩波書店 2002
- 小松茂美『続日本の絵巻13・14 春日権現記絵上・下』中央公論社 1991
- 永島福太郎『一条兼良』吉川弘文館 1988
- 安田次郎『尋尊』吉川弘文館 2021
- 圓仁 深谷憲一訳『入唐求法巡礼行記』中央公論社 1995
- 辻善之助編『大乘院寺社雑事記』角川書店 1964
- 蜷川親元『親元日記』(国立公文書館デジタルアーカイブ)
- 塙保己一『群書類従』(国立公文書館デジタルアーカイブ)

## 参考文献

能勢朝次『能楽源流考』岩波書店 1979

伊藤正義『伊藤正義中世文華論集』和泉書院 2016

大槻文藏監修天野文雄編『世阿弥を学び、世阿弥に学ぶ』大阪大学出版会 2016

天野文雄『能苑逍遥(上・中・下)』大阪大学出版会 2010

樹下好美「龍神物の能の成立—金春禅竹の関与の可能性をめぐって—」『中世文学第三十七号』中世文学会 1992

表章・加藤周一校注『世阿弥禅竹 日本思想体系24』岩波書店 1974

伊藤正義校注『日本古典集成謡曲集上』新潮社 1983

西野春雄校注『新日本古典文学大系謡曲百番』岩波書店 1998

佐成謙太郎『謡曲大観』明治書院 1931

末木文美士『草木成仏の思想』株式会社サンガ 2017

末木文美士『日本仏教史』新潮文庫 2015

田村芳朗「天台本覚思想概説」多田厚隆・大久保良順・田村芳朗・浅井円道校注『天台本覚論 日本思想体系9』岩波書店 1973

宮本正尊「『草木国土悉皆成佛』の佛性論的意義とその作者」『印度学仏教学研究9巻2号』日本印度仏教学会 1962

三宅晶子『歌舞能の確立と展開』ペリかん社 2001

高橋悠介『禅竹能楽論の世界』慶應義塾大学出版会 2014

松岡心平編『ZEAMI—中世芸術と文化03』森話社 2005

天野文雄『翁猿楽研究』和泉書院 1995

表章『大和猿楽史参究』岩波書店 2005